

沖

俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

渴 仰

能村 研三

俳人のびきんこと

俳句総合誌の五月号、六月号で「俳句」「俳句界」「俳壇」が震災の句の特集を組んだ。私にもこの内「俳句」と「俳句界」から震災の句の依頼がきたので出稿した。

夏至ひとり中二階にある俳書棚

半夏雨筒癖つきし表彰状

長崎・善丁谷、伊王島

卯波立つ離島減らしの橋架かる

「蚊焼」てふ隠れ集落海霧深く

「沖」でも、五月号では、励ましの意味をこめて、東京周辺の同人会の幹事の方を中心に、六月号では、被災地の同人の方々に「震災を詠む」として作品を寄せていただいた。今、この時に起こった出来事をそれぞれの立場から、いかに詠み、その記録を残すことは俳壇にとつて、とても大きな意味があることだと思つたからである。

被災当事者ではないのに市井の一個人として大震災の句を詠むことはかなりむずかしいことで、被災者の現実の苦しみもわからないのに、傍観者の一人として詠むことは如何かという意見もあることは確かだ。

しかし、この現実から目を背けて花鳥風月だけを詠んでいる気持にもなれない。

俳句を志すものが一番大切にしなければならぬことは「今、この瞬間を詠む」ことである。震災から三か月経った今もなお、震災、原発事

父 詠 み し 地 へ の 渴 仰 青 山 河

切 支 丹 に 隠 れ 離 れ や 花 樽

堂 涼 し 聖 水 盤 の 扇 貝

薄 暑 光 聖 歌 廊 へ の 急 梯 子

ル ル ド へ の 細 道 新 樹 伝 ひ か な

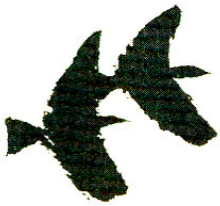
朝 風 ぎ て 柵 聖 鐘 の 紐 の 張 り

故の現実是我たちの心の中に重くのしかかっており、直接大きな被災に遭わなかったものたちも、被災者に心を寄せて現実を受け止めていかなければならない。

自らの責任において、文学として一心に表現した十七文字は大変に重たいもので、これ故に俳句が文学であることが立証されるのである。

仙台の俳人高野ムツオさんの呼びかけで、震災復興の俳句コンクールが企画され、「沖」にも、その案内を掲載した。投句料は、全額、被災地への義捐金になるそうで、「俳人としてできること」と考えたとき、ささやかであつても協力していかなければならないと思う。

能村 研三



蒼茫集



禍 神

大畑 善昭

椿一輪乗せ禍^{まが}神^{かみ}となる津波
冴返る被災地星をびつしりと
悲しみを胸につつみて春マスク
蝶と来よ津波に吞まれたる魂は
いのちまづ無事被災地の蓬餅
行く春の癒ゆるなき傷誰も負ふ

改 行

安居 正浩

余り苗吹かるる時は力抜く
一心に見て初蝶を汚しけり
改行のやうに春愁つき離す
つなぎたいつなぎたくない入園児
半身を蔵書に埋めて亀鳴けり
幸せであり春の風邪ひくことも

うとうとと

菅谷たけし

藤棚にあり長短といふ個性
どの色も喜び色のチューリップ
四月尽原発の語彙ふりふりて
海・天・地去年とちがふ五月来ぬ
うとうとと薬の効いてあたたかし
青嵐天主に足軽具足あり

キーン先生

楠原 幹子

しやぼん玉ふた揺らぎして円くなる
帰化なさるキーン先生松の芯
世界中からがんばれ日本若葉風
新^祝たなるスタート青葉若葉かな
掘り出され竹の子つむじ曲げてをり
初鯉精悍な縞ならびたる

ステンドグラス

細川洋子

ステンドグラスの左右対称鳥の恋
綿シャツの風に膨らむ愛鳥日
目借時画鋏のあとに画鋏留め
自動改札一斉に開く夏つばめ
前頭葉耕してゐる草むしり
地表てふ皮膜いちまい花の塵

蛩ぶくろ

北川英子

逝く春や鏡の奥の扉が開き
麦秋の没日に触れし匂ひせり
たしかに声や振り向けば蛩ぶくろ
香り立つ菖蒲湯術後一年目
昇降機の間引運行薄暑かな
祝京葉支部
新生の息吹きここより若葉どき

いのちの数

藤原照子

穴の数いのちの数や大千潟
空振りの地震速報月おぼろ

地震跡の鉄路の徐行蝶の昼
明暮れの余震に敏感き春障子
唐松の芽吹や五感解き放つ
目に見えぬものへ怖れや新樹雨

北京ダック

宮内とし子

春月や鍵なき部屋の坊泊り
仲徳緒子子様
小走りに花追ひ黄泉の国までも
本流を外れし水音犬ふぐり
高原の馬の鞍干す風五月
麦の秋遠いところを見て歩く
北京ダック飴色に焼け街薄暑

東日本大震災

工藤節朗

燕来て重症の街縫ひあはす
震災の陽炎跨ぐものばかり
戒めの海の碑を置く芽吹山
春の地震日本を二つに折りたみ
悲しみに出遇ひて辛夷傷みけり
飯の世の余寒に柩並べられ

ミモザサラダ

千田百里

師みまかりし五月いづくに在りても朴
五月来る青雲にまた浮雲に
傘雨忌や椅子の背にある凭れ艶
活花の根じめにビー玉置いて夏
パソコンにたたら踏む指夕薄暑
五月憂しミモザサラダを頬張つて

朴きほふ

千田

敬

しじまとふ安心ありて鳥雲に
南風の浜片羽がへしに鳶の笛
日本海より青田波のぼり来る
竹皮を脱げよ伸びよと風戯ふ
登四郎忌間近と朴のきほひ咲き
妻と居て黙も会話の新茶汲む

この辺り

吉田政江

陽炎や登四郎旧居この辺り
散り惜しむ桜よ田端文士村

らいてうの自由は青しつばくらめ
集合に少し間のあり蝌蚪の池
牙を剥く海とは見えす春の月
かの日より微震にさとき明易し

緑立ち

田所節子

たんぽぽや冒険コースといふ山路
春月や水惑星の海ふくれ
鯉のぼり風棒になり棒になり
皆帰つてゆきたり母の日の疲れ
ひこばえや支部に新たな歴史生れ
京集支部発行
緑立ち祝はれて支部誕生す

歪みし我

荒井千佐代

浅蜷めし父母亡き家の梁軋む
傾ぎぶり佳き黒松や柏餅
夏に入る海は一途に紺深め
聖堂に潮の匂へる日傘閉づ
箱庭の真中にちちとははが立つ
金魚どち歪みし我を見てをらむ

合

図

久染 康子

祝 京都文部省定

寄る鳥の絶えぬ肥沃の大千潟
潮干狩帰る合図の帽子振る
花は葉に「歩こう会」に古希デビュ
ー
ぼうふりむし水面裏にしがみつ
き
柳 徳柳まう子様
白衣靡かせ薫風に乗り給ふ
今日立夏湯呑み茶碗を薄手にし

山河に礼

秋 葉 雅 治

みちのくの山河に礼いし鳥帰る
あかき根にあをき葉束ね菖蒲の湯
湯 湯に熱
流れ疾き「ひょうたん島」の青葉潮
竹皮を脱ぐや一肌ぬぐつもり
泰山木高きに掲げ魯迅墓碑
頂上は間近駒草岩を噛む

悠久の空

樋 口 英 子

日本の子供が好きで燕来る
かたまつて白魚に色生れけり

悠久の空をしだるる桜かな
梨咲いて下総台地動きそむ
白木蓮に月深海のごとくあり
身を絞りアルペンルート燕翔く

果実のごとく

辻 美 奈 子

早苗田に根の国といふやはらかし
大地よりレタス果実のごとく挽ぐ
おくれ咲くさくらを悼みごころとも
地震計かすかに振るる蝶の昼
愛鳥日ままごと遊びかまびすし
先生は雨男てふ進級す

抽 斗

松 井 志 津 子

抽斗にかの夏ねむるハーモニカ
出漁ヘラジコ提げゆく海南風
操舵室窓全開に五月来る
春眠の覚め際地震の濤かぶる
地震あとの段差を隠し杉菜生ふ
今日余震なかりしを言ひ新茶汲む

潮鳴集



白 壁

田山登喜子

遠富士の見ゆる安心昭和の日
帆曳船立夏の景をふくらます
白壁の白の迫力みどりの日
雲あしの速しぼうたん咲きつくす
万緑の真ん中に居て余震なほ

水彩画

林昭太郎

春風やまだ濡れてゐる水彩画
N 極は北を求めて鳥曇
蝌蚪に足われに年金特別便
演壇の水よく減りて蔦若葉
息かけて磨くハモニカ麦の秋

余 震

高木嘉久

パンダの面売れて上野の遅き春
蜩蝶どこかで電話鳴りどほし
豆腐屋は落花の方へ曲りけり
落花急余震を迎へ撃つごとく
余震なほ藤房といふ震度計

窓若葉

栃内和江

葦の角いま洪民の冷えを脱ぎ
燭台の明かり一つや四月尽
被災地の午後は永かり夏燕
何をもて胸を飾らむ窓若葉
一と月遅れの入学式の日
海よりも陸のさびしき青葉木菟

沖作品



能村研三選

春愁ふカランダツシユの長き芯

市川市

七田 文子

漠然とした不安花散る日本も

軒先で風を乗換へしやぼん玉

微睡めば夢に色あり若葉風

羽搏きをしてみやうかな更衣

黙といふ諾もあるべし冴返る

兜煮の白目をこぼす余寒かな

衣擦の音すれ違ふ実朝忌

握手して力をもらふ梅真白

朧夜やコンピナートの眠らぬ灯

ランプより疾く鬼出でよ花夕べ

その後の消息知らず遍路傘

水かけて浮き出す碑文花あふち

異次元の窓のほころび月見草

ほうたるの水より生れて火を点す

東京

能美昌二郎

長崎

岩永 充三

やがて吾も遡上してゆく滝の中

燕飛ぶ少し波ある船溜

白樺の風に子の寝るハンモック

春暁や菜園に早や人の影

小女子の釘煮にいのち一つづつ

大小の蝌蚪住み分けて谷地の水

春昼や力み抜けずに齒科の椅子

みたりほど迷子潜むか花の闇

春光の跳ねて木床のレストラン

春愁や小石ひとつに足とられ

インターフォン越しにもわかる新社員

地震後の心ざらつき蝌蚪の水

故郷のある幸言はれリラの花

飛花落花セコムのシールそこに

予約札に拒まれ花のレストラン

埼玉

大石 誠

市川市

荒井千瑳子

東京

五十嵐章子

沖作品 15句選評

*

能村研三

羽搏きをしてみやうかな 更衣 七田 文子

切字の「かな」は詠嘆を表すが、この句の場合は、実現への願望の意を表す。古くは活用語の連用形に付くシガナ、体言に付くモガナの形で用いられたが、平安時代には体言にヲガナ・ガナが付いても用いられるようになった。「何々を」したいものだ。「何々」がほしいなあ、といった意味。更衣の時期の心軽やかな気持が、「羽搏きをしてみやうかな」という措辞につながった。冬服から生地 of 薄い夏物になると、何か自由に羽搏いてみたい気分にもなる。

黙といふ 諾もあるべし 冴返る 能美昌 郎

喜んで賛同することを「快諾」というが、しぶしぶ諾うことを「黙諾」ともいう。辞書には「黙って承知する。知らないふりをして承諾する。」とある。人と人との人間関係には、このような場面がしばしばある。本来であれば異論を唱え、承諾しかねないことでも、仕方なしに諾わなければならないこともあ

る。人間社会の複雑さを垣間見る一瞬である。

ほうたるの水より生れて火を点す 岩永 充三

上田五千石の句に「初めての蛍水より火を生じ」という句があるが、梅雨入りに合わせるように、川べりに蛍が舞い始める。都会に近いところでは、このような光景は見えなくなってしまうが、水の澄んだ川沿いから一斉に蛍が飛び始める。鼓動のリズムを刻むように淡い光が点滅し、川面を覆うように乱舞する幻想的な光景が広がってくる。冷たい水から光を放つ蛍の不思議さが描かれている。

やがて吾も遡上してゆく 滝の中 大石 誠

滝の中でも名爆と言われる滝は見ていても気持がスカッとするものだが、直瀑で岩盤に当たる事無く滝水が一気に滝壺へと落ちる姿は豪快である。この見事な滝を見ていて、自分が天に登るときはあの勢いよく落ちる滝の中を遡上していけたらと思つたのである。自らの人生を振り返りつつも、その終焉を予測するにも豪快で明るいのがよい。

春光の跳ねて 木床のレストラン 荒井千 瑤子

ヨーロッパでは木を使うことが最も贅沢だとされることがあるが、日本でも時折、内装が木を主体にしている素敵な店がある。高級レストランの床には普通は絨毯が敷き詰められているが、洋風の古民家などを改装したレストランの床が木煉瓦で、時には見事な木組みであったりもする。木の温もりを感じさせ訪れた人の気持を落ち着かせてくれる。木枠の窓辺から差し込む春日が眩しかった。(以下略)